

# 賀茂真淵の著述（擬古文）における

## 「から」系のことば

塚本泰造

はじめに

国学者の擬古文に対する評価は概して低い。しかしながら欠点とされる中古和文との乖離現象こそ、そこに当代に何われる日本語の変貌が明瞭に現れ、現代日本語の性格の解明につながるものとして価値があると考えられる。

本稿では、本居宣長の著述に見られる「から」の考察（塚本二〇〇一）に引き続き、賀茂真淵の著述に見られる「から」「からは」（以下これを「から」系とする）を取り上げ、擬古文という表現の背後に、日本語の、論理的性格への変貌がどのようにかがわれるかを考察する。

### 1 擬古文研究の意義はどこにあるか

国学者の擬古文に対してよく指摘されるのは、擬古に徹しきれなかった、その限界である（「当時においてすら、思うこと

を十分に書きあらわせぬ悩み」（亀井他（一九六五）P.76）「古文を模しても完全にまねおおせないと」（鈴木（一九七七）「漢語・仏語・俗語を混えて表現された近世の複雑な思想感情の悉くを、雅言のみで表現しようとした処」（中村（一九八〇））。擬古文そのものの体系的記述もまだ進んでいない段階にある<sup>1)</sup>。近世の文語表現の一つととらえ、その先行研究を見ると、主に文学作品（読本）を対象としておおよそ特徴が二点指摘されている。

一つは中古和文との文法上の乖離（形態・呼応・体系とのずれ）、もう一つは誤用（口語的要素の混入——ただし常用的な、その場しのぎの代置ではない要素）である<sup>2)</sup>。こうした「破格」現象は、当時の一般的な文語や口語に影響されたものと見なされている。

しかし、擬古文は、創作のみだけではなく、随筆・学術も担った、近世の論理的表現の代表的なものである。その表現に使われる当時の日本語が、論理的性格を強めて形態を分化させ

てきたという観点（日本語の性格が場面依存型から客観的な論理性を強めていく方向へ変化していること（山口（一九八九）、条件表現に限っても、その分析的傾向の強まりに伴って形態が分化していること（阪倉（一九九三）山口（一九九六）小林（一九九六））から捉え直すと、積極的な意義を持ち得る。なぜなら、事態を細かく分けて捉えようとする当代の新しい表現欲求によって、まず古いコマの用法に変化が見られるはずだからである<sup>50</sup>。つまり、個別の語の用法すなわち「誤用」の方に、かえって現代につながる日本語の表現の流れが端的に示されると考えられる。

さらに、対象が理論の文<sup>51</sup>、学術を主とするものであるから、この論理性・形態の分化に応じた「誤用」が現れやすいのは因果関係の複文であろう。学問の主張は根拠の明示を必要とするからである。文法的に言えば、条件表現において擬古を貫こうとするにも関わらず、当代の欲求を満たそうとした現象が現れやすいと予想される。

塚本（二〇〇一）では、この問題を考察するにあたって、まず本居宣長の著述にしほり、次のような接続助詞的な振る舞いを見せる「から」をとりあげた。（用例は文献名のあとに、本居宣長全集の巻数―頁数）

そは書紀を一わたり見て、かのかざり多かることを、よくも考へず、文のまゝに意得るから、さも（上代から文字はあつたと）思ふぞかし

古事記伝 9-17

そは巻のはじめつかたに、宰相中将とある此官に任せられたるを、十六の時とし給ふからの誤也

源氏物語玉の小櫛 4-274

この「から」は、二つの叙述内容を必然の関係で結びつけるものである。そのつなげ方の特徴は、不自然と判断した事態に対する批判・説明の表現に集中することにある。

前件の内容は次の三種に分けられる<sup>52</sup>。

I 学問的批判・学問上不正・誤りである事態に対して原因を示す

II 道徳的批判・道徳的に不正である行い・考えに対して III 不自然な逸脱した表現

後件の内容は、誤ったあるいは不自然な事態（「ひがこと」と称されるようなこと）が位置している。

文法的に似た振る舞いを見せる「故に」と比べた場合<sup>53</sup>、二つの叙述内容を結びつけた中で、その事態が不自然であると判断された場合、その因果関係を複文で批判的に表現しようとする<sup>54</sup>。「故に」よりは「から」の方が使われる傾向にあった。

「故に」（そして「は」「より」）では表しきれない表現欲求が「から」を使わせているわけである。

新しい表現欲求への対応が日本語史へ還元されるには、試みといったような個人の欲求に留まっていけないこと、いわば表現上の系譜が描けるかどうかを検証しなければならぬ。

擬古文の嚆矢は賀茂真淵に求められる。

：此大人の学の、いまだおこらざりしほどの世の学問は、歌もたゞ古今集よりこなたにのみとゞまりて、万葉などは、たゞいと物どほく、心も及ばぬ物として、さらに其歌のよきあしきを思ひ、ふるきちかきをわかまへ、又その詞を、今のおのが物としてつかふ事などは、すべて思ひも及ばざりしことなるを、今はその古言をおのがものとして、万葉ぶりの歌をもよみいで、古ぶりの文などをさへ、かきうる、こと、なれるは、もはら此うしのをしへのいさをにぞ有ける、

玉勝間 思想大系P13

したがって、本稿では、同じく因果関係を表す複文に用いられる、以下のような「から」系のことばに焦点をしぼる。(用例は文献名のあとに、統群書類従完成会版全集の巻数―頁数)

いにしへ今をわかちあへぬからに、古ことしぬばへる人少なきこそうれはしけれ、  
文意考 19―74

〔奈留弮〕に對し古へは弓弮に玉をまき、鈴を懸つれば、手に取ごとにも鳴からに、鳴弮ともいふべし、：是に強たることいふ人多かれど、惣て當らず、  
万葉考 1―33

川にといはで、川乎立といふからは(立つの意味でなく)

立は借字にて断ことなるを知へし、  
万葉考 1―60

宣長の著述に見られる「から」と、擬古文の先駆者である賀茂真淵の著述に見られるこうした「から」系のことばの用法を比較し、以上の問題を考察してみたい。

## 2 「からに」の特徴は何か

「からに」「からは」の使用状況を表1に示す。対象は真淵の主要著述であり、弟子などの手が加わった可能性が低いもの(したがって、『万葉考』は巻六まで)、著作活動時期に偏りがないこと、これらを考慮した。

初期の著述から晩年のものまで、「からに」「からは」が現れている。この結果から、「から」系は常用であると見てよいであろう。用例が見られないものは分量が少ないものである。それぞれどのような特徴が見られるであろうか。

真淵の著述に見られる「からに」は、二つの叙述内容を必然の関係で結びつけるものである。

この「からに」自体は上代・中古に見られることばだが、以下の三点で誤用である。

- 1 本来は歌語であるのに散文の用語として使われている
- 2 上代・中古和文に見られない(吉川(一九七七)「からは」と共存している)

- 3 前件と後件との関係は上代・中古の典型である時間的な連続性(石垣(一九五五)が薄く、原因・理由と結果をあらわすものになつている)<sup>1)</sup>

そのつなげ方の特徴は、当時の通念・通説に対し異議を申し立てる表現に集中することである。

後件の異議を支える、前件の内容は三種に分けられる。

表 1

\* ( ) は言及例・対訳の例 \* | | は異文の例 \* [ ] は存疑

文献名	成立	刊行	から 非活用語+	活用語+	からに	からには	からは	ものから	備考
万葉集遠江歌考	1742	1820	0	0	0	0	0	0	
延喜式祝詞解	1746		0	0	1	0	0	0	
万葉解	1749		0	0	1	0	2	1	
文意考：流布本 (文意考：広本)	~1751	1802	0	0	1	0	0	0	0
			0	0	0	0	2	1	
万葉新探百首解	1752	1851	2	0	0	0	0	0	
源氏物語新釈(別記~閑屋)	1758?		20(4)	3	3	1	25(2)	1	6(6)
書意考	1760~		0	0	1	0	2	[1]	0
歌意考：流布本	1764?	1800	0	[1]	0	2	0	2	0
国意考	1764~1772	1806	0	0	1	0	1	1	1
万葉集問目	1764~1768		0	0	0(1)	0	25	0	0
(歌意考：広本)	~1784		0	[1]	0	2	0	2	1
宇比麻奈備	1765	1781	2(1)	0	1(1)	0	7	0	0
にひまなび	1765	1800	0	0	7 2	0	0	0	1
万葉集竹取翁歌解	1766	1824	0	0	0	0	1	0	0
冠辞考		1767	1	0	7	0	24	0	0
祝詞考	1768	1800	0	0	2	0	18	0	0
万葉考(卷一~六)	~1768	1769/1825/1839	2(14)	1[1]	23(14)	1	59	1	4(4)
語意考：流布本	1769序	1789	0	0	4	0	5	0	0
(語意考：清書本)			0	0	4	0	5	0	0
三部仮名鈔言釈		1775	0(4)	[1]	0	2	0	3	0(1)

I 後世の行為に対する学問的批判を述べる中で、

a 中国の、日本より劣った面をあげて「からごころ」を間接的に批判するもの

b 古(優れた上古、古言)を忘れていゝるもの・さかしらを加えたもの

II 上代の賛美

III 一見誤り・不可解に思われている事態(ことば・歌・行為を含む)に対してそれが訂正を必要としない理由

I の例

a (中国は) やつこか立出ん心をこそ下にはおもはめ、さるからに臣は君をなけらし、その臣も家人にはおそはれつゝ、いつか穩かなる日あらんや、

書意考 19-186

日の入國は、こまやかなる思ひかねを好むからに、事も音も随てさはなれば、こもかた(絵)を用うめり、

語意考 19-124

(中国は) 事の本これの日いつる國といことならず、た、日放くにはしも、限しらえぬ詞をおのゝく形もて分しらせまくするからに、煩らはしくなもある、

祝詞考 7-177

b 後世〇(異本「の」)人は文字題にてよむからに、哥のすがたかたくなし〇(異本「心」)ひくし、

にひまなび 19-209

「なびけこの山」と幼稚な願いをそのまま出したのは「まことのまこと」であるが、後世人は此心を忘れて、巧みてのみ哥はよむからに、皆そらごと、成ぬ、

万葉考 1-120

後世人は古書を見ず、私の拙き心もてよまんとするからに、；馬をむま、梅をむめと書が如きひがことどもあるめり、

三部仮名鈔言釈 12-333

古を忘れてはならないということを前件に批判的に述べないなら、後件にその効用を説くことになる。

又古言は哥にはよろしからぬ○(異本「と」)も、  
知おくからに古意をあきらむることあり、

にひまなび 19-201

次の例は「傳へのまにまに」から分かるように暗喩で効用を説くものである。

いつこをはかとしらえぬ大うみの原をこくふねも、先  
つふな人の傳へのまに／＼まかちとるからに、おもふみ  
などにはつといへり、

語意考 19-144

## IIの例

(上つ御代には)顯には建き御威稜をもて、内には寛  
き和をなして、天の下をまつるへまし、からに、いや榮  
○(異本「え」)にさかえまし、民もひたふるに上を貴  
みて、おのれもなほく傳はれりしを、

にひまなび 19-200

たみの心うらうへしあらねば、よしやあしやさやかな  
るからに、罪なひたまひをさめたまふもたはややすくして、  
大御代はいやさかえに榮ませりけり、万葉考 1-6  
これらは単なる贊美にとどまらず、当時の上代及び万葉輕視  
の風潮に対する異議申し立てを条件表現で担ったものである。

## IIIの例

然れば一年の間、工人等分番交替して仕奉るからに番  
匠の名はあるめり、 三部仮名鈔言釈 12-340  
身に一つ、二行名はなし、あしき名にてはあしき人と  
のみ聞ゆるからに、あまたあらぬ名といへり、

万葉考 2-51

こは防人にて筑紫へ行て三年経るからに、故郷の妹が  
織縫て着せし衣の袂の末のそこなひ來つといへり、

万葉考 2-201

しぬはず顯れてだに君に戀ばや、かく隠しつ、戀から  
に堪がたし、といふ也、 万葉考 2-357

こなたもかゝる穢の中なるからに(普通は告げるだろ  
うが)は、かりてきこえさりしを更に覺し知やと同し事  
をいふ也 源氏物語新釈 13-314

そ(天地)か中に生る、もの、こ(四季)をわから得  
るからに、うたひ出る哥の調べもしか(雄々しいのもあ  
れば弱々しいのもある)也、 にひまなび 19-200

いづこはあれど香山は、初國しらし、御時より皇宮の

鎮めともいはひ給ふからに、ことにたふとみて天降著て  
ふ語をいひ冠らせしなるべし、  
冠辞考 8-15

これは自らの行為に対しても用いられる。

(この歌が額田王の歌ではなく大海人皇子の歌である  
として) さて下の綜麻形てふ哥ぞ女哥にて、それに吾勢  
ともいひたれば、それこそ額田姫王の和哥なれ、こゝは  
必男哥なるからに、是のみは類聚哥林を合せ考て、大海  
人皇子命の御哥とす、  
万葉考 1-45

これらのつなげ方は以下の例のように「—だからこそ、(カ  
エツテソノママニ)」と補うと分かりやすい。

あはぬ程には露のあだし命を、あふにしかへばとまで  
思ひつるに、一夜の後は末かけておもほゆるからに、な  
かなか長くもあれかしと思ひける哉と也、ふかく思ひ入  
しよし也、  
うひまなび 12-78

いわば逆接ではないが、「逆説」的に後件の理由・原因とな  
るものである。

例外は次の二例であつた。

此畿志知仁云々の音、万つの言のはてに有時は、其事  
定りて動かす、其言既おこりて後定れるからに、二(体  
音ウゴカヌコエ)にをれり、  
語意考 19-131

(けせてね…は)言既動きて令するからに、四(令音  
オフスルコエ)におりぬ、  
語意考 19-131

以上の三類にほぼ共通するのは当時の通念・通説に対する異

議申し立てである。その表現を支える欲求は解釈や価値の基準  
の転換である。

文法的に「からに」に似た振る舞いを示すのは「故に」「よ  
り」である。そして上記三類と重なるように見える用法も少な  
くない。

それを人として、別に仁義禮智など名付けるゆゑに、

とることせばきやうには成ぞかし、  
国意考 19-16

然るを六帖に、…と誤りしより、  
催馬樂に、…、源氏

すまに、…、ともかけるは、  
皆あやまりをつたへて正  
さざりしなり、  
万葉考 2-40

また真淵自身もほぼ同意であることを認めている。

(於毛布惠爾) 惠ハ、故也、  
思ふからにといふに同し

(ユエニカラニ)、  
万葉集問目 6-247

(君自ニ) キミカラニ(に対し) からに、  
よりにもゆゑ  
にも轉し通はせり、  
別記あり、  
万葉考 1-206

此巻に、思就西、君自ニ、戀八將明、  
とよめる、この  
からは、従とも故とも聞ゆ、  
(カラニヨリ、ユエ)まづ  
故は、ゆゑともいひて、  
物の本あり因有る事をいへり、  
然れば、上の言の意を受けて  
加留我由恵と云は、  
此有之由  
てふ言にて、  
上にいへる事を由縁としていふことば也、  
さて此かるがゆゑを約めてか  
れ(るがゆゑニレ)ともい  
へり、…其加礼と加良は音通へり、  
(カルガユエニカレ  
…カラ) 仍て、  
君加良爾を、  
君由恵爾といひても聞ゆめ

り、(カラニユエニ)

又、加良と与利と通ひ聞ゆるは、此所より行彼所より來てふも、此と彼を各本として、それによりて有事をいへり、是は右にいふ由縁てふ言軽く用ゐし也、(カラニユリ)

万葉考 2-307

しかしながら、右の言及は「から」「ゆゑ」「より」がほぼ同じ意味だと述べていると理解すべきであろう。なぜなら「から」の注釈・対訳に「より」や「ゆゑ」が使われていないからである。

〔見飽。物有〕ミルニハアケル。モノカラニ〕常相見るには飽くものなれば、一日をおきてゆかんとするを、妹はたゞ我心の忘るとか恨みんとなり、

万葉考 2-343

〔惠麻須我可良爾。古麻爾安布毛能乎〕エマスカガラニ。コマニアフモノヲ〕乗來し夫の悦ひゑむからに、馬をもほめてよろしく飼などすれば、いつもわがせをおるそかに思はずていそぎ來たれといふめり、

万葉考 2-229

〔吹からに秋の草木のしをるれば〕秋の末にあらしの吹たてば、かならず草木のしばみそこなはる、からに、山風の名を荒しといへるぞ、げにうべなる事にざりける也、(からにさばさばからに)

うひまなび 12-147

次の例は「ゆゑ」の訳に「からに」を選んだかのように見えるが、

〔幾多毛。不零雨故。〕イクバクモフアラメユエ) 雨なるからになり、 万葉考 2-81

この歌(2840)の「故」は単純な順接ではない(いくばくも降らぬ雨故(11なのに) 我が背子がみ名のこごたく滝もどるに)。逆説でつながると解釈した可能性が強い。

また、以下の例のように時間的に、概念的に連続した前件からの当然・自然な帰結を示している場合(特に延約通略)は「からに」が現れない。

煤びの須備を約れば志と成ゆゑに須志といふ、

万葉考 2-32

淡海國はもと阿波宇美てふ名なるを、其波宇を約れば布と成故に、假字は阿布美と書也、 語意考 19-137

から様の服を織せられしより、その様の衣をは、皆から衣といふ也けり、 万葉考 2-24

飛鳥岡本宮へ選ませしより、小墾田は故郷と成て、その橋の板の朽たるほどなれば、 万葉考 2-30

次の例のような「おのづから」も「からに」と共起しない。

日放る國人は巧みなる事を好むより、言もおのづから一こゑのうちに多きことわりこもれ、ば、かたなくはこどゆかし、 語意考 19-124

人としいへば此心(まこと)を知らが故に、おのづから

理の上をなすこと○(異本「つね」)也、

国意考 19-23

以上のことから「からに」の方が「故に」「より」よりも前件と後件の断絶もしくは相対的独立の度合いが強いと見てよいだろう。次の「より」との共起例では「からに」の前件の方が、後件に対してより独立している。

今本、こ、に問答と標せるは、既いふ如く、人万呂哥集のしか加はりしより、後の人こ、にも問答哥の有からしにする事しるければのぞきつ、万葉考 2-74

それでは、もう一つの「からに」は、この「からに」の「故に」「より」ではあらわせない表現欲求にどう関わっているであろうか。

### 3 「からに」の特徴は何か

「からに」は「故に」「より」よりも相対的独立が強く、逆説的表現を担っていた。前件と後件の相対的独立という点から言えば、それが一番強いのは「からに」による表現である。

これは「とあるからは」が典型で、内部・外部徴証から後件を帰結する表現に用いられる。

川にといはで、川乎立といふからは(立つの意味でなく)立は借字にて断ことなるを知へし、

万葉考 1-60

(万葉3392引用)と有からは、砂の下くゞるなど云は推量のことにて、「つくばねのみねより落つる」は(岩とゞろくばかりの水の落る事なり、

うひまなび 12-34

後件に批判が述べられることもある。

一本に笛と有からは(大角・小角ではなく)何をかいはん 万葉考 1-157

上にゆつりなばといへるからは、(マサメであつて)今本にまされと訓しは助辞違へり、万葉考 2-36

(古今集序に万葉集に入っていない古い歌と書いてあるのに)今その集(古今集)に万葉の哥七首ぞある、かの序に書しからは、(今ある二十巻のものがはたして万葉集か)万葉を正し見ざらんや、万葉考 2-250

此言巻十にもこ、と同しく於曾と有からは、(獺は)癡の意にして、理り明らかなるを、古への假字をもしらぬをこ人どもの、説をなして人まどはすめり、

万葉考 2-289

これは「からに」Iに隣接する用法である。「からに」と同じく異議申し立てにつながるを見てよい。相違点は、この「からに」が注釈行為に限られがちであることと、異議申し立ての対象が諸説であることである。

以上、「からに」「からに」に共通するものは、異議申し立てであり、その機能は、他の条件表現を担う「故に」「より」「ば」

よりも、学問的確信を背景に前件と後件との独立の度合いを強くして、前件を（情意的に）強調・卓立することである。

そしてより正しい擬古文を確立しようとするならば、上代中古和文に見えない「からは」は使えなくなる。その表現欲求はいずれどれか（別）の形に担われなければならなかったはずである。

#### 4 宣長の著述に引き継がれたものは

あるか

真淵・宣長の著述において論点の「から」系の使用状況は次の通りである（言及例は除く）。

真淵	活用語十から	4	「1」	からに	62
	からは	183	「3」「1」	（文献数21）	
宣長	活用語十から	397*	からに	22	
	からは	28			（文献数47）
	（*から十の	21	から十なり	32）	

同じ擬古文による著述であっても、真淵の「からに・からは」主流から、宣長の「から」主流への変化が明らかに見られる。

この二人の国学者の著述を比べるなら、因果関係の複文であらわされた異議申し立ては、批判的色彩を強め（異議が正論の

座を占め）、「からに」「からは」と同じく前件を強調する「から」に引き継がれたと見られる。大胆に「に」を省いた理由は

分からないが、より文法的に自由に振る舞えるような形として「から」がある。

真淵の「からに」IIの用法がなくなり、後件に批判を主張する表現へ限定・分担されたわけである。

#### 5 まとめ

以上、「から」系のことはの使用に、新しい表現の欲求に対応した用法と分化が見られることを論じた。その新しさとは、「ば」「故に」「より」などでつなぐ大まかな因果関係の表現では表しきれない、学問的確信を背景にここを強調したいといった情意の付加である。その情意は、学問の確立に伴って、異議を目立たせることから後には形態を変えて批判的主張へ移り変わったといえる。

本稿はいわば師弟の著述にしぼった考察である。その他の（国）学者の著述との関連はさらに検証されねばならない。

注

（1）池田（一九五九）山口（一九八二）岡本（一九八七）など。

（2）前者では（橋本（一九五〇）、福島（一九五九）、鈴木（一九六三）（一九七四）（一九七八b）（一九八六a）（一九九六）（一九九七）、

小松（一九七四）、岡本（一九八七）（一九八八）、山本（一九八七）など、

係り結び・陳述副詞の呼応の乱れ 時の助動詞の分布とその上接語の相違 助動詞の複合形の相違 ケシ型形容詞 動詞形容詞の活用 破格 形容詞補助活用の本活用化

などの現象が指摘され、後者では（橋本（一九五八）、池田（一九五九）、鈴木（一九七八）（一九八六）、山口（一九八二）、中村（一九八四）など）、

近世では「ものから」が中古和文とは逆に順接の意味で使われていた

などが指摘されている。

(3) 橋本（一九五八）では、黒本を対象として「さすが」などの先触れの副詞が多く使われる点を、近代語の論理化と方向を同じくするものと指摘している。また近代語の特徴である論理性・分析性が文語を表現する際にも働いてそれを生じさせたのではないかと述べているが、その特徴と文語との具体的な関わり方については論を展開していない。

(4) 中村（一九五五）の分類による。

(5) それぞれの例

I 凡て神代の故事を、漢意にて見るから、か、る言痛説は出来るぞ

かし、

これを濁るから。初學の輩は。不の意のまじと一つに心得て。ま

ぎらはすことおほきぞかし。

詞の玉緒 5-238

II 分不相応にゆたかに暮さんとするから、内証は困窮する者甚多

き也、

秘本玉くしげ 8-133

紫上幼き故に、かへるささうさうしくおほすから、此女の家にひとつれ給ふ也 源氏物語玉の小櫛 4-393

III 「ちたびうつきぬたの音に」「袖の露ぞくだくる」とあるが「う」といふから、（あまり露にはいわない）くだくるといへり、

美濃の家づと 3-353

(6) 「部」からに似たつなぎ方をしたものは確かにあるが、大部分は次のように、批判の余地のない事実から当然帰結されることを表す。この用法が「から」には見られない。

諸本ともにみな之とある故に、今は其に依り、

古事記伝 9-47

空に懸れる故に、浮橋とはいふならむ、古事記伝 9-161

(7) 真淵自身、俗言・平言・雅言（祝詞考）7-194、平言（万葉集問目）6-212、241、267、276、「其此の平言」（同6-298）ということばを使っており、ことばの位相差や時代差は認識していたと考えられる。

(8) 千葉（一九九七）では、万葉集に見える「からに」は時間的な先後関係をつなぐものではなく、因から果への過程に人為が介入しない、事象それ自体の進展に重点を置いた関係表現であるとする。ただし、真淵の「からに」の使用は、この万葉集の「からに」から影響を受けた

としても、後述するように、自身「からに」に言及するところは、因果的に捉えており、用例もかなり前件後件の独立性が強く、「さから」にあたる人為の介入を考慮した表現である。

(9) 当時五十音図の各段と活用に関して何らかの通説があったか、あるいは単に口語的に強調が入ったかとも解釈できるが、確証はなく、例外として示す。

【参考文献】

- 池田 勉 (一九五九) 「近世擬古文の解釈と文法上の問題点」 『講座 解釈と文法 6』、明治書院
- 石垣謙二 (一九五五) 「助詞」から』の通時的考察」 『助詞の歴史的研究』、岩波書店
- 岡本 勲 (一九八七) 「近世擬古文の文法 —村田春海・橘千陰について—」 『国文法講座』 5、明治書院
- (一九八八) 「新井白石の文章」 『国語と国文学』 65-3
- 亀井孝他 (一九六五) 『日本語の歴史 6』、平凡社
- 小林賢次 (一九九六) 『日本語条件表現史の研究』、ひつじ書房
- 小松寿雄 (一九七四) 『雨月物語』の文章』 『国語と国文学』 51-4
- 阪倉篤義 (一九九三) 『日本語表現の流れ』、岩波書店
- 鈴木丹士郎 (一九六三) 「上田秋成の擬古文的要素」 『文芸研究』 43
- (一九七四) 「近世文語における呼応現象のくずれと変容」 『専修国文』 8
- (一九七七) 「擬古文」 『国語学研究事典』 執筆項目、明治書院
- (一九七八) 「『かならずしも』小考」 『専修国文』 22
- (一九七八) 「読本から見た馬琴の文語と文体」 『国語と国文学』 55
- 11
- (一九八六 a) 「近世文語についての覚書」 『日本語学』 5-5
- (一九八六 b) 「近世語の文と句の連接 — 文語における用法を通じて—」 『日本語学』 5-10
- (一九九六) 「近世文語の性格」 『国語と国文学』 73-12
- (一九九七) 「近世文語研究の構想」 『専修国文』 60
- 千葉一子 (一九九七) 「万葉和歌の『から』について」 『国語と国文学』 74
- 10
- 塚本泰造 (二〇〇二) 「本居宣長の著述(擬古文)に見られる『から』について」 『筑紫語学論叢』、風間書房
- 中村幸彦 (一九五五) 「擬古文」 『国語学辞典』 執筆項目、東京堂出版
- (一九八〇) 「擬古文」 『国語学大辞典』 執筆項目、東京堂出版
- (一九八四) 「語義考証 5 奥の細道の『ものから』」 『中村幸彦著 著述集 第十三巻』、中央公論社
- 橋本四郎 (一九五六) 「里見八犬伝の文体とその文語 — 文語史研究の基礎として—」 『国語国文』 25-11
- (一九五八) 「近世における文語の位置」 『京都女子大学紀要』 17
- 福島邦道 (一九五九) 「雨月物語の文法上の問題点」 『講座 解釈と文法 6』、明治書院
- 山口明穂 (一九八二) 「尚古・擬古意識と文体史へのその反映」 『講座 日本語学 7 文体史 I』、明治書院
- (一九八九) 「国語の論理」、東京大学出版会
- 山口堯二 (一九九六) 『日本語接続法史論』、和泉書院
- 山本陽史 (一九八七) 「上田秋成の文法」 『国文法講座』 5、明治書院
- 吉川泰雄 (一九七七) 「接続助詞『から』と慣用語『からは』」 『近代語誌』、角川書店
- (つ)かもと たいぞう／第三三回卒・宮崎女子短大)